

大任務を果たすのだという決意が示されている。すなわち、弥陀の他力回向を根拠として、衆生自らが自利利他円満の仏道を主体的に歩む形になっている。

こうして、浄土真宗は、われわれ普通の人間自身の実践によって、「念佛に意義のあらん限り心零上より進で社会制度を根本的に一変する」ものの、すなわち、宗教であると同時に社会主義でもあるものとなって現代にのみがえったのである。

斎藤茂吉と浅草寺

小泉 博明

夙慧であった斎藤茂吉は、一八九六(明治二九)八月に上山尋常高等小学校を卒業すると郷里の山形県上山金瓶村を離れ、浅草三筋町にある養父紀一の経営する浅草病院へ寄寓した。上京する前の茂吉の宗教的な原風景を考察するに、まず実父守谷熊次郎(後に伝右衛門)が熊野三山や蔵王山に対する信仰心が篤く、念仏信者でもあったこと、神仏習合的な色彩の強い山岳信仰をもつ山形県の風土に育ったこと、さらに金瓶村宝泉寺の佐原隆應和尚の薫染により浄土教的な信仰心が醸成されたことである。このように熱心な念仏者である父と、山岳信仰の宗教性を持つ山形県の風土と、菩提寺の佐原隆應の薫染が三位一体となり、茂吉の血となり肉となり、茂吉には仏教的なものが体内に血脈相承したと言える。そして、この宗教的な原風景が、浅草寺への信仰へと継承されるのである。

茂吉は養父紀一の浅草病院へ寄寓するが、すぐに正式の養子となったわけではない。茂吉は医者となることが、そして「感

謝せられざる医者」と言われた精神病医になることが宿縁であった。茂吉自らは、精神病医を「狂人守」と呼び歌に詠んだ。茂吉は第一高等学校を卒業し、東京帝国大学医科大学への入学が決まり、一九〇五(明治三八)年七月に、漸く紀一の次女である子の婿養子となり、自らの居場所が確保できたのであった。その間の茂吉の境涯を慮るに粒粒辛苦の日々を積み重ねたのであった。

上京後、茂吉は東京府開成尋常中学校へ編入学した。茂吉がはじめて浅草寺へ詣でた月日は判明しないが、おそらく徒歩圏内である浅草寺へすぐに詣でたと考えるのが自然であろう。浅草寺に関する歌の初出は、開成中学校三年生であった茂吉が、一八九九(明治三二)年一月七日に詣でた時の歌であり、台湾へ出征中であった次兄守谷富太郎宛書簡に六首記されている。金瓶村から上京した茂吉にとって、浅草はどんなに刺激的で魅力的な街であったろうか。素直に新年を言祝いだ歌で、とくに秀歌でもないが、隅田川があり、当時は田圃も残っていて、とび(とんび)が生息して、凌雲閣の上空をとびが舞っているという情景である。浅草という磁場に老若男女が引き寄せられるのは、金龍山浅草寺という観音霊場という信仰の場だけではなく、六区を中心に劇場や後には映画館が林立する歓楽街、さらには裏には玉の井、吉原という遊里(悪所)を控えた場であったからである。同年五月には、浅草三筋町から神田区和泉町の東都病院へ、そして一九〇三(明治三六)年八月には紀一が創設した赤坂区青山南町に偉容を誇る青山脳病院に居を移した。茂吉は「折に触れ」て、浅草を題材とした歌を詠み、巣鴨病院

時代の第一歌集『赤光』では「おひろ」との離別後、途方に暮れ、いつのまにか浅草の丹塗りの堂へと足を運んだと詠んでいる。その後、長崎医学専門学校時代でも、欧州留学時にも、浅草の歌を詠んでいる。欧州留学時に肌身離さず持参した観世音の御守護は、浅草寺のであると思われる。その後、欧州帰国の途次に青山脳病院焼失の一報が入り、青山脳病院の再建と、青山脳病院院長への就任という、茂吉の人生にとって筆舌に尽くし難い艱難辛苦の時期を迎える。精神病医として、病者の逃走、自殺、暴力に悩まされ、その重責が茂吉の双肩にかかったのである。日記には神々への崇拜ではなく、観音力にも崇拜し自らの護持を願う汎神論的な世界観がうかがえる。茂吉には宿命に忍従しようとする不安ながら逞しい勇気と、救済を信ずる寂しく敬虔な気持ちとが交錯するのである。

一九五二(昭和二七)年三月に、茂吉が浅草寺に参詣した写真がある。雑踏の中、観音堂に向かい、長男の茂太に後ろを抱きかかえながら、身体が麻痺しているので隻手で合掌している。祈りの刹那のこの写真は、茂吉の純粋な信仰の人の姿である。

戦後地域社会における皇族崇敬の検討

茂木謙之介

本発表の目的は戦後期の皇族崇敬について、特定の皇族と直接縁故のある地域における顕彰運動とその言説メカニズムを分析することにある。

近代日本の天皇崇敬をめぐる先行論はその構造を(天皇―国

民)の二極で理解し、その間に介在する皇族の位置づけは不明確である。歴史学研究における近代皇族研究では軍事史・政治史に偏重しており、文化史的考察が十分に為されていない。またこれら二つの研究潮流が共に全国レベルでの考察に留まっておらず、地域社会レベルでの検討の必要がある。

本発表では一九四六年一月の所謂天皇の「人間宣言」以降の時代状況における皇族崇敬の存続可能性について考察を試みた。対象としては現在も埼玉県秩父地方において秩父宮雍仁親王(一九〇二―一九五三)の崇敬活動を行っている秩父宮会について発足の経緯と初期活動の分析を設定した。分析に当たっては同会所蔵の文書を使用した。

まず秩父宮会の成立過程について考察を行った。同会は一九五三年一月の秩父宮の葬儀に参加した秩父市長・市議会議長・町村会長ら所謂地元の有力者を中心とした発起人らが、秩父宮の分霊を地元の秩父神社へ合祀することを目指して会の原型をつくり、そこに地域の自治体関係者・経済団体・文化団体・企業を糾合していった。其の中では予算面や人的な面において地方自治体が強力にコミットメントしており、活動内容を具体化していく過程に於いては秩父宮にまつわる施設の維持管理などといった直接的な皇族顕彰を行おうとする言説と、秩父宮を顕彰する集団の形成を契機として地域振興とも接続する言説とが混在していることが確認された。また、全国レベルの秩父宮顕彰の会として当時発足していた財団法人秩父宮記念会とは連携をとりつつも大同団結を目指した記念会との距離も確認され、そこからは両会の間にある目的の差異の可能性が指摘出来た。